気軽に〝こっせ〟Cosse亀田がオープン

郡山医療生協（福島）

いつ来ても、誰が来ても、何をしてもいい。郡山医療生協桑野支部（福島県郡山市）がある地域に今年8月、たまり場「Cosse亀田」がオープン。古民家をイメージした一軒家から、今日も笑い声が聞こえます。

文・新井健治（編集部）
写真・五味明憲

Cosse（こっせ）は郡山弁で「寄ってください」の意味で、亀田は地名です。亀田地区は郡山駅から西へ5kmほど、桑野診療所（現・桑野協立病院）が1974年に開設した地域で、いわば法人創業の地です。

17歳までここで暮らした石井うたさんが、築55年の実家を建て替えて提供。「亡くなった両親は地域にお世話になった。その恩返しです」と石井さん。

桑野支部の班会をはじめ、福島第一原発事故で郡山市に避難した住民の親睦会「ぽたんの会」や、一人暮らしの高齢者向けの昼食会、映画上映会、誰でも立ち寄れるカフェなどを定期的に開きます。

Cosse 亀田

小さなスペースが随所に。畳敷きでほっとくつろげる

雨受けに砕いた瓦を敷き詰める郡山医療生協の組合員（郡山医療生協提供）

古民家をイメージ

8月20日のオープニングセレモニーに参加した組合員は、「すてきなおうちね～」と口々に。古民家をイメージした建物は土間があり、太い梁を活かした天井は吹き抜け。和紙を使った照明、薪ストーブもあります。雨どいはなく、縁側の前に瓦を砕いて敷き詰め雨受けにしました。

石井うたさん

石井さんは設計段階から、郡山医療生協の職員や組合員と相談。支部の活動に使いやすいように、内装などを考えてきました。雨受けは職員と組合員が共同作業で造りました。

設計した阿部直人さん（一級建築士）は「家の中でも季節を感じてほしいので、雨の落ちる様子を楽しめるようにしました。石井さんのご両親の思い出が残るよう、砕いた瓦は実家の屋根から。和室のスペースを造り、好きな場所で自由に集えるよう工夫しました」と言います。

冬場に活躍する薪ストーブ

健康づくりの拠点に

オープニングセレモニーでは、民族歌舞団「花こま」が公演。花こまは東日本大震災の被災地を定期的に訪問。今回は福島県内の公演に合わせて訪れました。獅子舞や文楽の伝統を受け継いだ「車人形」を上演し、参加者を交えて南京玉すだれも披露するなど会場が盛り上がりました。

セレモニーに参加した郡山市役所地域包括ケア推進課の職員は「市民から『身近に居場所が欲しい』との声をよく聞きますが、実際はなかなかありません。すばらしい施設で介護予防にもなる」と期待します。

郡山医療生協専務理事の江川雅人さんは「古くからの組合員が多い地域に、新しい居場所ができた。法人の西部地域包括支援センターに近く、地域まるごと健康づくりの拠点になります」と言います。

自分らしく生きられる場

桑野支部理事の村上久枝さんは「もともと桑畑が広がっていた場所に家が次々に建ち、住民同士のつながりは希薄な地域。震災をきっかけに一人暮らしのお年寄りも増えているので、住民同士の交流の場として使わせていただきたい。散歩途中にふらりと寄れる雰囲気もいいですね」と話します。

郡山医療生協は福島第一原発事故の放射能被害を公害にならって「核害」と呼びます。住民の甲状腺エコー検査をはじめ、全身の放射線を検出できる検査機器（FTF）による測定、食品の検査、放射能の講演会などさまざまな対策を行っています。Cosse亀田では、原発の学習会や憲法Cafeなども開く予定です。

石井さんは東京民医連に勤務し、定年退職後は江戸川健康友の会（江戸川区）の副会長を務めています。ケアマネジャーの経験から「地域に高齢者の居場所があったら」と、退職後の生きがいとして私財を投じました。「最期まで自分らしく生きられる場として活用してほしい。気軽に寄ってください」と呼びかけます。

問い合わせは郡山医療生協（☎024・923・6212）へ。

オープニングセレモニーでは民族歌舞団「花こま」が公演